

先 見 の 明

院長 佐 藤 四 三

「先見の明」とは先の先まで見抜くこと、将来のことを前もって見通す力のことであり、出典は後漢書の楊彪伝の中、楊彪が曹操に対しての故事を念頭に置いて「私には金日磾のような先見の明も無い」と述べた言葉からとされています。

私の考える組織のトップたるもの①先見性、②統率力、③教養、④実行力、⑤企画力を備えているべきと考えています。湯浅志郎前院長は2008年4月より、2013年3月までの5年間姫路赤十字病院を引っ張ってくださいましたが、先生には5つの能力のうち、教養はもとより、特に先見性において能力を発揮されたと思います。先生の先見の明の一部を紹介いたします。

クリニカルマイクロシステムはアメリカのダートマス医科大学のネルソン、バタルディン、ゴッドフリーらによって開発され、その概念はアメリカやヨーロッパの国々だけでなく、世界各国に広まっています。2006年に、当時副院長であった湯浅先生は、患者と医療者がチームを組んで治療を行うということに感銘を受け、このシステムを当院へ紹介されました。最初内科病棟で取り組まれていましたが、2008年院長になられてからは、病院全体に推進すべく、看護部と協働し、広報誌、院内誌で紹介され、概念も職員に徐々に浸透するようになりました。今では全職員対象の「クリニカルマイクロシステム実践報告会」が定期的で開催されており、患者満足度の向上、職員の士気の向上、多職種の連携強化が確認されています。昨今では多くの病院でQC活動の重要性がうたわれていますが、当院ではいち早くクリニカルマイクロシステムとして取り入れ実践されています。今後もますます推進すべき点です。

姫路赤十字病院誌、年報、さわやかライフ、かわら版など病院発行紙の位置づけ、内容の整理に先生は尽力されました。2011年に姫路赤十字病院誌を学術誌と年報に分け、院内の各部署の活動を記録として残すことを推進されました。この記録を残し、継続することは容易なことではありません。記録する文化を醸成することは今後当院が発展するための基本であり、重要なことと考えます。PDCAサイクルを回すには記録は評価するうえで最も基本になることです。一方かわら版では赤十字精神、経営理論、DPCの意味するものなど病院の経営方針を全職員に啓蒙されました。組織のトップが行動に揺らがないことを書面で示すことの意義を示されていました。

2012年9月より12月までBCG（The Boston Consulting Group）による病院の評価、今後の方向性の示唆を受けました。この意義は湯浅先生が院長退職された後の病院の進むべき道筋を示したものです。結論は私が想像していたことと大きくは異なってはいませんでした。しかし結論に対して職員の誰もが納得する必要がある、この為BCGの役割は大きかったと思います。私にとっては様々なデータを集積し、それを分析し、評価し、プレゼンテーションをする一連の方法論をじかに見させていただいたことに意義がありました。

アメリカの著名な教育者ジョン・ホルトは「リーダーとは、周りを気にせず我が道を行く人です。他の人が自分に付いてきているかどうかさえも気にしません。」と言っています。湯浅前院長の心の中を推し量ることはできません。「先見の明」において確かに組織のトップでありました。今後限られた医療資源、超高齢化社会を迎え厳しい医療情勢となりますが、先見性を発揮し間違いのない方向性を定めたいと考えます。これこそが地域住民に対して病院の理念である、心のかような安全で良質な医療を実践することにつながり、ひいては「働きたい病院造り・治療を受けたい病院造り」に近づくことと考えます。